問題・解答用紙番号 21 の解答用紙に解答しなさい。

# 国　語

〈受験学部・学科〉

**3科目型 受験者**
法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、理工学部（住環境デザイン学科・建築学科・都市環境工学科）、農学部（食農ビジネス学科【文系科目型】）

**2科目型 受験者**
法学部、国際学部、経済学部、経営学部、現代社会学部、看護学部、農学部（食農ビジネス学科）

問題は一〇〇点満点で作成しています。

## Ⅰ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。（五五点）

民族学者の梅棹忠夫（うめさおただお）（一九二〇～二〇一〇）が、一九六一年、日本旅行倶楽部の雑誌『旅』（一〇月号）に、「京都は観光都市ではない――観光客のために存在していると思われては困る！」という文章を寄せている。いわく、最近は国の内外から大量の観光客が京都にやってくるが、彼らの多くは、この土地の文化に対してひどく無知である。近年は、「京都は観光都市である」といわれるようにもなったが、観光は京都という多面的な都市のもつ、ただ一つの側面に過ぎない。京都は同時に、学問の都であり、美術の都であり、工芸の都であり、宗教の都であり、商業都市であり、工業都市ですらある。京都を「観光都市」などと一面的に呼ぶのは、いかがなものか。

梅棹はさらに述べる。そもそも、京都に限らず今日の観光なるもの全般に、疑問を感じる。観光客は、近年の観光コマーシャリズムに甘やかされて、どこへ行く場合にも、「王さま」であるかのように乗り込んでくる。勝手な要求はするが、土地のことを理解しようという心構えがない。だが、最も恐るべきことは、観光地と呼ばれる土地に住む人間が、観光を意識することで、自らその土地と文化の主人公であるのを忘れて、外部からの得体の知れない連中に奉仕しはじめることである。

「観光は、人間をごう慢にする一方、人間をヒクツ[1]にもする」。

『旅』の同号には、こうした観光（客）批判を行う梅棹の文章に続いて、医師で評論家の松田道雄（一九〇八～九八）が、「観光バスに乗って見直した京都」というエッセイを載せている。こちらは、観光客を擁護する趣旨の文章であった。いわく、観光客が数多くの寺社仏閣を短い時間で廻り、次々と拝観料を落とすからこそ、それらの建物の修理などが可能になっている。よって、「京都の名所を維持しているのは京都市民でなく、観光客である」。

その観光客を喜ばせるために、寺院は彼らが何を求めているのかを、もっと考えるべきではないだろうか。たとえば、ある寺では寺内の案内を、すべてテープレコーダーと連動した拡声器にまかせているが、これはいただけない。庭園の説明をアルバイトの学生にやらせているケースもあるが、これも好ましくない。確かに、これらは観光の近代化ではあるのだろう。だが、寺院を訪れる観光客は、むしろ過去への郷愁を求めているのであって、寺院には仏の道に生きる僧侶が欲しいに違いないのである。そうであれば、ガイドを機械にまかせたりするよりも、僧侶は宗教者としての態度をきちんと見せたほうが、「結果として観光産業のなかの自己の価値をたかめるものである」。

これら梅棹と松田、双方の意見には、それぞれの理があると思う。とはいえ、京都に年間九千万人近くの観光客が訪れるようになった現在（二〇一六年の京都府内への観光入込客数は約八七四一万人、京都観光総合調査）から見ると、どうだろうか。観光客に対してハイタ[2]的な地元民の立場を鮮明にする梅棹よりも（梅棹は京都生まれの京都育ち、一九六〇年代には京都大学を拠点に活動）、地元に収益をもたらしてくれる観光客の意義を尊重し、彼らとどのような関係を結んでいくのが適当かを真面目に考えている松田のほうが（松田は生後すぐから京都で育ち、京都に診療所を開く）、よりダトウ[3]な見識を持っていたように感じられる。

特に、京都の寺院や僧侶の存在は、B訪問者のノスタルジーを喚起するからこそ、観光資源として有効に活用できるという松田の発想は、この一九六一年の段階では、かなり斬新なものであったと思われる。

いずれにせよ、彼らが観光客についてその賛否を問うようになったのは、京都を訪れる観光客が、この頃までに急激に増えていたからである。京都への観光客数は、一九四九年までには、おおよそ一七〇万人程度にとどまっていたが、一九五〇年代には急速な勢いで増加しはじめ、五〇年代末には一千万人近くにまで上っていた。観光客が急増した理由の一つとしては、この時期に、京都や奈良への古美術観光が、きわめて盛んになったことが大きい。美術史研究者の太田智己が、その動向について多角的に整理している。

決定的であったのは、国の文化財行政による、古美術観光の振興策だろう。一九五〇年五月、前年に起きた法隆寺金堂壁画の火災による焼損をきっかけとして、C文化財保護法が制定された。同法は、まずもって文化財の「保存」を目的としたが、それだけではなく、文化財の「活用」について

も規定していた。そして、文化財保護委員会のあいだでは、古美術を観光資源として「活用」した古美術観光を推進すれば、文化財の管理も行き届き、その「保存」にも必ずやつながるはずだ、という認識が共有されていた。

国に先駆けて古美術観光の振興に着手していた京都市も、こうした動きを受けて、その活動をさらに積極化させていく。同市では、一九三〇年に観光課が設置されており、戦前からすでに、古美術による観光開発に可能性を見出していた。この観光課は戦時中の一九四一年に解体されるも、一九四七年に復活し、その二年後には観光局に格上げされている。同局が刊行した冊子『国宝と京都』（一九四九年）では、古美術が「観光資源」として明確に位置づけられていた。そして、文化財保護法が制定された一九五〇年以降、同局は、古美術観光に関する統計的な調査を実施し、京都の古美術ガイドブックを発刊するようになる。

加えて、一九五〇年代には、古美術観光を含めた修学旅行[D]が本格化していく。文化財保護委員会は一九五二年に指導参考書『学習指導における文化財の手引』を発行し、学生が「飛鳥、白鳳、天平期の古美術」などの文化財の価値を適切に理解できるよう、学校教師にその指導方法を示している。日本修学旅行協会の機関誌『修学旅行』でも、一九五〇年代には古美術観光を修学旅行に組み込むのに意欲的であり、京都や奈良での古美術見学の方法について、学生への指導の仕方が具体的に記されていた。

修学旅行での古美術観光の推進については、国による文化財「活用」の方針だけでなく、戦前の学校教育のあり方からの脱却、という意図もあったようである。すなわち、戦前の国家主義的時代の修学旅行は、皇室にかかわる伊勢神宮や宮城（皇居）が中心であり、このような状況に対してはアレルギーを持つ、戦後の教育関係者が少なくなかった。だが、交通の便や団体宿泊の受け入れ環境を考えると、残された選択肢は、必然的に京都や奈良に限られてくる。その結果、修学旅行といえば、京都や奈良の古寺や仏像巡り＝古美術観光、という観念が、一九五〇年代までには強固になっていたのである。

かくして、一九五〇年代以降、古美術を目当てに京都や奈良の古社寺を観光する人びとが、目覚ましい勢いで増えていった。奈良を中心に古美術を巡る風習は、大正時代には既に確立していた。だが、戦前のそれは、あくまでも和辻哲郎*に代表される文化人や教養人が主体となっており、一種のエリート文化としての側面が強かった。それに対して、戦後に隆盛する古美術観光については、大衆文化としての性格が色濃い。京都や奈良の寺院を訪れて、堂塔や庭、仏像などを見物する習慣が、階層や年齢や性別を問わず、幅広い層の人びとに受容されていくのである。

ただし、このような古寺と仏像の観光化に対しては、違和感を抱く知識人[E]も少なくなかった。たとえば、小説『［　　X　　］』で著名なドイツ文学者の竹山道雄（一九〇三～八四）である。彼は、一九五三年に『藝術新潮』誌上の連載で、古寺巡礼の印象記を書く仕事を引き受け、「戦後

生活の疲れからのリクリエーションというくらいのつもり」で、奈良へと旅だった。ところが、古都の文化は意外なほどに魅力的で、そこに人間精神の見事な表現としての美術を発見することができた。その一方で、奈良の古寺には宗教性を感じることができず、この点もまた意外であった。

ここはただの観光都市にすぎず、多くの大寺院は、古代美術品の管理者として、ひたすらそういう意味での経営に汲々(a きゅうきゅう)としているように思われた。（中略）もちろんたいていのお坊さんはまじめにしずかに仏様をお守りしているのであろうが、宗教的生命はもはや閉鎖的な世界の中に気息奄々(えんえん)として生きながらえているにすぎない。

彼が宗教性を感じられなかったのは、寺院だけではない。そこに集う人びとにもまた、彼が思い描いていたような信仰や、あるいは美の世界を、見出すことはできなかった。

奈良には無数の遊覧者がおしかけ、いたるところ修学旅行で充満していた。この人たちは見物客であって巡礼ではなかった。どこに行っても、中小学生が喚声をあげてかけまわっていて、大仏殿の中などは運動場のようだった。おそらく知的興味をもっている人はいるのだろうが、仏にも芸術にも畏敬の念をもっている人はありそうにはなかった。

かつて和辻が巡った大正時代の奈良であれば、こうした知識人の高尚な趣味に水(b)を差すような光景には、出くわさないで済んだだろう。ひっそりとした寺院の堂内で、仏像を心ゆくまで鑑賞し、古代人の信仰や美の世界に対する想像の翼を、思う存分に広げることも可能であった。だが、戦後の古美術観光のフキュウ[4]によって、そうしたエリートの悠長な営みは、実現が難しくなっていった。これは、日本の仏像巡りの性格が、また新たな段階へ入ったことを意味している。

大衆的な古美術観光の拡大はまた、仏像に対する美術史的な知見の、広い層への浸透を導きもする。美術評論家の矢代幸雄（一八九〇～一九七五）は、先の竹山と同じく、『藝術新潮』誌上に一九五八年から翌年まで連載を持った。そのなかで彼は、かつて法隆寺などの古寺の参詣人は少数で、その寂しさが一つの魅力でもあったが、最近は多数の「観光的来訪客」を迎えるようになったので、F雰囲気がだいぶ変わったと述べている。

近ごろお寺へ行ってみると、もはや浮世離れのした何か神聖なところへ来たというような気分は大方失われて、見物人はいきなりお堂へ入って行って、まるで展覧会へでも来たように、仏像を眺める、あるいは胸や胴体の肉づけがどっしりしているとか、腕の柔かさ、手のしなやかさがすばらしいとか、更に彫刻のくろうとらしく、仏像を側面から覗ったり、うしろへまわって見上げたりして、腰のひねりがたまらないとか、胴体の量感が立派だ、とかいう。また坊さんが案内して説明するのを聞いていても、なかなか美術史の専門知識に詳しく、この衣文は翻波(ほんぱ)式であるから、寺伝では奈良朝の制作というが、実は平安初期の制作に相違ない、というような説明をしてくれる。これは慥(たし)かに知識の進歩に相違ないが、お寺へ行ったような気がしないで、何だか博物館へ行ったような錯覚を起す。

多くの人間が古美術観光を行える時代とは、彼らがみな美術評論家になりうる時代でもある。評論家になるのは、仏像鑑賞を趣味とする観光客だけではない。古美術を保存する寺院の僧侶もまた、その美術品としての仏像の評論家になりうる。そうした美術評論家が充満する寺院の堂内は、まるで博物館のようではないだろうか。

こうした想念に襲われた矢代は、和辻の友人であり、若い頃から和辻と一緒に奈良の古美術巡りを行ってきた仲でもある。つまり、彼自身がむしろ、古寺の仏像を美術として論じて、その神聖性の相対化を進めた先駆者の一人でもあったのだ。しかし、その彼にしても、戦後の観光客の増大による、古寺の空間の変貌に対しては、違和感を抱かないではいられなかった。奈良の古寺に押し寄せた古美術観光の波が、それほどに激しく、急だったのだろう。

戦時下の亀井勝一郎*は、寺院の博物館化を強くケイカイ[5]していた。このままでは、先人たちが寺院に向けてきた、一途な信仰の世界が失われてしまうのではないかと。だが、そうした彼の懸念もむなしく、多くの観光客の殺到する、戦後の奈良や京都の古寺は、信仰のための施設としての風貌を、少なからず喪失していった。かわって、文化財が展示される博物館としての様相を、はっきりと強めたのである。

（碧海寿広『仏像と日本人』一部改変）

＊ 和辻哲郎……哲学者（一八八九～一九六〇）。著作に、奈良の古寺を巡った『古寺巡礼』（初版一九一九［大正八］年）がある。

＊ 亀井勝一郎……文芸評論家（一九〇七～一九六六）。著作に『大和古寺風物誌』（初版一九四三［昭和一八］年）がある。

問一　破線部1～5のカタカナをそれぞれ漢字に直しなさい。

問二　波線部a・bの言葉の本文中の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちからそれぞれ選びなさい。

a　汲々と

ア　ひとつのことで精一杯であるさま
イ　物事がうまくいかずに苦しむさま
ウ　関心をもって熱心に取り組むさま
エ　よどみなく作業を進めているさま

b　水を差す

ア　疑問を抱く
イ　興味をもつ
ウ　邪魔をする
エ　不満を漏らす

問三　傍線部A「梅棹忠夫」の見解として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア　京都に住む人間は近年の観光コマーシャリズムに甘やかされており、京都にやってくる観光客に対してごう慢になっている。

イ　京都という都市にとって観光はただ一つの側面に過ぎず、それゆえ「京都は観光都市である」と決めつけるのは誤っている。

ウ　京都には他の観光地とは異なり、土地のことを理解しようという心構えがない観光客が乗り込んできており、不愉快である。

エ　京都に暮らす地元民こそが京都の土地と文化の主人公であるにもかかわらず、彼らの多くは自己の文化に対して無知である。

オ　京都はそもそも観光都市ではないのだから、京都市民は観光客が支払う拝観料に頼ることなく、名所を維持すべきである。

問四　傍線部B「訪問者のノスタルジーを喚起する」ような寺院とは、松田道雄によれば、どのような寺院か。本文中の言葉を用いて、二十字以内で答えなさい。

問五　傍線部C「文化財保護法」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア　京都市では戦前に観光課が設置され、文化財保護法の制定後に観光局に格上げされた。

イ　文化財保護法は、一九五〇年に起きた法隆寺金堂壁画の焼損を契機として制定された。

ウ　文化財保護法は当初は文化財の保存を目的とし、活用については規定していなかった。

エ　文化財保護法の制定以前には、京都を訪れる観光客は年間二〇〇万人に達しなかった。

オ　文化財保護法の制定以降に、国は京都の古美術ガイドブックを発刊するようになった。

問六　傍線部D「修学旅行」について述べた次のア～オのうちから、最も適切なものを選びなさい。

ア　戦前には奈良の古美術を巡る習慣はなく、それゆえ戦前の修学旅行は伊勢神宮や皇居が中心であった。

イ　機関紙『修学旅行』では読者層の学生へ向けて、京都や奈良での古美術見学の方法が紹介されていた。

ウ　文化財保護委員会は戦前の学校教育のあり方を継承するために、修学旅行での古美術観光を推進した。

エ　交通の便がよかったことが、京都や奈良での古美術観光が修学旅行の定番となった理由の一つだった。

オ　文化財を活用するという国の方針に先駆けて、古美術観光を組み込んだ修学旅行が本格化していった。

問七　傍線部E「違和感を抱く知識人」であった竹山道雄と矢代幸雄について述べた次のア～オのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア　竹山によれば、京都の文化には人間精神が見事に表現されていたが、意外にも古寺には宗教性を感じることができなかった。

イ　矢代によれば、戦後の古寺には多数の観光客が来訪するようになり、古寺が持っていた魅力の一つである寂しさが失われた。

ウ　竹山によれば、寺院に集う人びとは巡礼者ではなく見物客であり、彼らの中に信仰や美の世界を見出すことはできなかった。

エ　矢代によれば、古寺の仏像は美術ではなく一途な信仰の対象であり、それゆえ彼は仏像の観光資源化に対して懸念を示した。

オ　竹山によれば、僧侶たちの多くは美術品としての仏像の管理者に過ぎず、仏に畏敬の念を持っているようには見えなかった。

問八　空欄 X に入る作品では、戦死した同胞を弔うために出家するにいたった日本兵の姿が描かれている。この作品名として最も適切なものを、次のア～オのうちから選びなさい。

ア　海と毒薬　　イ　黒い雨　　ウ　二十四の瞳

エ　野火　　オ　ビルマの竪琴

問九　傍線部F「雰囲気がだいぶ変わった」とあるが、矢代幸雄の見方によれば、最近の寺院の雰囲気はどのようなものであったか。本文中の言葉を用いて、四十字以内で答えなさい。

## Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、解答に句読点等の記号がある場合は、それも字数に含むものとする。（四五点）

Ⅰ日本の大学生は進化する必要がある、などと私が言おうものなら、私の学生も含めた生物学徒は鬼の首を取ったように苦情を述べるだろう。私の主張に、ではない。進化という言葉の使い方に対してである。

生物学的な進化の意味は、遺伝する性質の世代を超えた変化である。現代のそれは発展や発達、進歩の意味ではない。生物進化は一定方向への変化を意味しない。目的も目標も、一切ないのだ。

そのプロセスの要は、ランダムに生起した変異がⅡ自然選択のふるいにかかって起きることである。まずはダーウィンの説明から見てみよう。

「……どんな原因で生じたどんなにわずかな変異でも、ほかの生物や周囲の自然との無限に複雑な関係の中で、その変異が何かの種の個体にとって少しでも有益であれば、その個体の生存につながる。そしてその変異がその個体の子孫に受け継がれるのが普通である。さらにその子孫も生き残る可能性が高くなる。なぜなら、どんな種でも、定期的に生まれる多くの個体のうち、ごくわずかしか生き残らないからである。この、わずかな変異でも、有用であれば保存されるという原理を、私は『自然選択』と呼んでいる。それは、人間による選択の力との関係を示すためである」。

この自然選択の作用で、より高い繁殖率や生存率を持つ変異が、次世代にほかの変異より多くの子孫を残す結果、存在比率を増やしていく。選択によるわずかな変化が蓄積し、少しずつ漸進的に進化する。

自然選択は、動植物の育種のために人間が行う変異の選抜――人為選択がヒントになっている。だが人為選択と異なり、自然の作用には育種家が抱くような変化の目的や目標はない。ダーウィンにとって、どのような変異が生じるかはランダムであり、どのような性質が有利かは環境によって変わるので、進化は条件次第でどのような方向にも進みうるものだった。つまり進化には発展や進歩のような、あらかじめ定まった方向はない。退化も進化である。ダーウィンは、寄生虫が自由生活者の祖先から進化し適応を遂げた結果、祖先が持っていた器官や能力を失う、つまり退化することが多いとも述べている。

一定の方向ではなく、あらゆる方向に変化する結果、多様化が進む。現在の生物が、初期の生命と比べて複雑に見えるのは、単純なものから様々な方向への進化で多様性が高まった結果の一部を見てそう思うに過ぎない。現在の地球上に棲む生物種は、すべて共通祖先から枝分かれし、同じ進化の時間を経てきたものだ。だから、その中に祖先的な形質を残した種は存在するが、ある種が別の種の祖先ということはない。

ダーウィンは1837年のノートにこう記している。「Ⅲある動物がほかの動物より高等である、

と語るのは馬鹿げている」。また友人のジョセフ・フッカーに宛てて、こう手紙に書いている。「神よ、〝進歩する傾向〟というラマルクの馬鹿げた考えから、私をお守りください」。

進化は進歩でも発展でもない、そうダーウィンは考えたのである。ではなぜ生物学以外の分野や一般社会では、進化を発展、発達、進歩の意味で使うのだろう。

まずダーウィンの主張を整理しよう。その要点は、第1に生物の種は神が創造したものでなく、共通祖先から分化、変遷してきたものであり、常に変化する、という主張。第2に、生物の系統が常に変化し、枝分かれする以上、種は類型的な実体ではなく、科や属や亜種と同じく、形のギャップで恣意的に区分される変異のグループに過ぎないという主張。第3に、そうした変化を引き起こした主要なプロセスは自然選択である、という自然選択説の主張である。そしてこの三つに基づいて、生物の進化は何らかの目標に向かう進歩ではなく、方向性のない盲目的な変化である、という主張が導かれる。

よく誤解されているが、エヴォリューション――進化（evolution）という言葉を最初に使ったのは、ダーウィンではない。それどころか現在の私たちが進化と表現している現象を、ダーウィンは最初、エヴォリューションとは呼ばなかった。1859年に出版した非常に長いタイトルの本（On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life――自然選択すなわち生物の闘争における有利な品種の維持による種の起源について、の意）――略称『種の起源』でダーウィンは、最後に「進化する」という動詞形で用いただけで、エヴォリューションという用語は使わず、その代わりにトランスミューテーション（transmutation）という用語を使った。また自らの理論を、「変化を伴う血統の理論」（theory of descent with modification）と呼んでいた。ダーウィンがアルフレッド・ラッセル・ウォレスとともに発表した、進化における自然選択の作用についての論文では、トランスミューテーションすら使わず、それを「変化」としか表現していない。

ところが[Ⅳ]19世紀前半にはすでに、エヴォリューション――進化という言葉は、学術界で一般的に使用されていた。たとえばダーウィンがまだビーグル号で世界一周の航海途上にあった1832年、チャールズ・ライエルは次のように記している。「最初に存在した海洋の有殻アメーバ類のうちのいくつかが徐々のエヴォリューションにより、陸地に生息するものに改良された」。

それはたとえば星雲のエヴォリューションのように、非生物的自然の連続的な複雑化や発達、という意味でも使われていた。また人間社会の進歩にも使われていた。歴史家のフランシス・パルグレイブは1837年に、「立憲主義による私たちの政治形態は、エヴォリューションによって作り出された」と記している。

もともとエヴォリューションとは、「展開する、繰り広げる」という意味のラテン語、evolutio に由来する語で、コンパクトに折り畳まれていたものが一方向に展開するような現象を表現するの

に使われていた。それが転じて17世紀以降、個体発生を意味する語としてエヴォリューションが使われた。当時の前成説の考えでは、精子や卵の中に子供の形のひな型が入っており、次第にそれが展開するのが発生の過程だったためである。

エヴォリューションの考え方自体は、自然主義の出発点――古代ギリシャまで遡る。まずはプラトンが万物にはその物をその物たらしめる不変の本質があるとする本質主義を唱えて、進化のライバルとなる不変の思想のほうが先に誕生する。だが同時にプラトンは、宇宙における秩序の発生という概念を着想した。さらにアリストテレスによって、無生物から植物、動物へと連続する自然観が導かれた。アリストテレスは、自然物の存在に合目的性[a]を認めた。この秩序と連続がのちに「存在の連鎖」――植物から動物、人間へと生命の直線的な秩序を表す自然観へと発展した。これにキリスト教の時間的な変化の概念が融合し、進歩を意味する歴史観となった。アリストテレス以来の目的論を受け継ぐ、一つの目標に向けて進む進歩観である。

進歩を光とすれば、衰退は闇である。西欧には、光が作る影のように、進歩観の裏側にそれとは正反対の世界観が張り付いていた。旧約聖書に記された堕落神話――アダムとイブから続く堕落や、大洪水を箱舟で生き延びたノアの子孫が各地へ移住した後、新しい土地で暮らすうちに堕落していく、といった衰退観である。人類は神による創造以来、堕落し衰退し続けるという世界観、さらにキリスト教の終末論は、逆に西欧の進歩への強迫観念[b]を支えてきた。

18世紀にはフランスのジョルジュ・ビュフォンが、「ときの流れの中で、発達と退化を経て、ほかのすべての動物を生み出した」と歴史的な種の変化の可能性を指摘していた。進歩と退化（堕落）を決めるのは環境の違いだと考えたビュフォンは、生命の活力を低下させる新大陸の気候は、動植物のみならず人間も退化させると説いた。この主張に激怒した米国建国の父、トマス・ジェファーソンは、反論のため米国の自然や動植物を称える活動に力を入れ、巨大なヘラジカの剥製をビュフォンのもとに送りつけた。

ドイツではビュフォンの説が支持を集め、イマヌエル・カントは人種の違いを気候の違いで生じたものだと主張した。

フランスではジャン＝バティスト・ラマルクが１８０９年に、親が環境に応答して獲得した性質が次世代に先天的な性質となって伝わる、という考えで生物の変化を説明した。ラマルクによれば、生物は体の構造をより複雑なものへと進歩させる内的な性質を持つという。環境が大きく変化すると、生物は生き残るために変化しなければならない。脳を持つ動物は意識的に、それ以外の生物は無意識的に、変化した環境に適した性質を獲得しようと努力する。その結果身体に生じた変化は、子に受け継がれ、先天的な性質となって世代を超えて伝えられる。使われない性質は逆に失われる。こうした獲得形質の遺伝による目標に向けた進歩で、生物は祖先から子孫へと徐々に性質が変化していく、と考えたのである。

これに対し、解剖学者・古生物学者のジョルジュ・キュヴィエは、天変地異による種の絶滅と入れ替わりで種構成の歴史的な変遷が起きるとする「天変地異説」を唱え、ラマルクの主張する祖先―子孫の漸進的変化を批判した。

英国では18世紀から19世紀初めにかけて、神の摂理は自然法則の形で作用し、自然の発達を通じてその摂理が実現する、と考える、進化理神論（Evolutionary deism）と呼ばれる主張が広がっていた。生物の個体発生もこうした摂理が作用する例と考えられていた。この進化理神論者の一人で、ダーウィンの祖父、エラズマス・ダーウィンも、１７９１年にエヴォリューションを個体発生の意味で使い、こう記している。「種子から進む動物または植物の幼体の段階的なエヴォリューション」。

進化理神論では、最初は不明確でまとまりのない均質な状態から始まり、それが発達して、複雑でまとまりを持つ秩序ある多様性に至る、と考える。最終的に到達するのは、最大の幸福を実現する理想的な状態である。この進歩・発展の過程がエヴォリューションと呼ばれるようになった。成体という目標に向かって発達するのが個体発生であり、エヴォリューションなので、それを生物の歴史的な変遷に置き換え、個体発生と同じく何らかの目標に向けて発展する現象と見なせば、それはエヴォリューションとなる。

19世紀前半には、エヴォリューションは内的な力によって生起する一定の方向に向けた時間的変化や、単純なものから複雑なものへと発達、発展する現象を広く表現する言葉として使われるようになっていた。

１８４４年に匿名で出版されたロバート・チェンバースの『Vestiges of the Natural History of Creation』は、神の摂理である自然法則のもと、太陽系が形成され、既存の種から新しい種が生まれ変遷して、人間に至る、と主張した。

ラマルクもチェンバースもエヴォリューションという語は使わなかったものの、地球上の生命の発展は、あらかじめ決められた目標に向けた首尾一貫した計画の展開であると考えていた点で一致していた。こうした生物の進歩的な変化の考えは、すでに19世紀前半には英国社会でかなりの程度まで受け入れられていた。ダーウィンが『種の起源』で進化の考えを提唱する以前に、エヴォリューションは、様々な現象の発展、発達、進歩や、一つの目標に向かう変化を意味する語として使用されていたのである。

この由緒正しい意味でエヴォリューションの語を使い、宇宙の発達、生物の複雑・多様化、人間と精神の発達、社会の発展・進歩を、自然法則として統一的に説明しようとしたのが、ハーバート・スペンサーである。彼の著書『First Principles』が出版され、世間の評判を得るのは１８６２年だが、１８５０年代にはすでにその構想を完成させ、一部を発表している。スペンサーが生物のエヴォリューションを駆動する力として重視したのは、ラマルクの考えである獲得形質の

遺伝を主とする内的な力だった。１８６４年に出版された『生物学原理』（The Principles of Biology）で、適応の要因として獲得形質の遺伝とともに、自然選択を一部だけ取り入れたが、それが適用できる性質の範囲は限られる、と考えていた。

ダーウィンのトランスミューテーションは、このような自然界の秩序ある発展、つまりエヴォリューションを否定するものだったのである。エヴォリューションの語をダーウィンが使わなかったのは、彼が着想したトランスミューテーションが、当時広く使われていたエヴォリューションとはまったく異質なものだと認識していたからだ、と言われている。方向がどのようにも変わりうる生物の変化、目的のない変化というダーウィンの基本的な考えは、革新的なものであったのだ。

その生命史のイメージは、単純な形から出発した生物が、あらゆる方向に枝分かれしながら無目的に変化する結果、時間の経過とともに人間を含む果てしない多様性が生まれていく、というものだった。『種の起源』の末尾は、動詞形ながら本中で唯一の、進化する、という言葉を使い、こう締めくくられている。

「こんな壮大な生命観がある――生命は、最初一つか少数の形のものに吹き込まれた。そしてこの惑星が重力の法則に従い回転している間に、非常に単純な始まりから、最も美しく、最も素晴らしい無限の姿へと、今もなお、進化しているのである」。

ダーウィンは、秩序ある発展ではなく、果てしなく広がり、あらゆる方向に変わり続ける命の、あてのない旅を、目標なき「展開」の意味で進化する、と描写したのだろう。

だが、ダーウィンが方向性のない進化にこだわり、進化を進歩と見る考えを常に拒否していたかというとそうでもない。ダーウィンの記述にはぶれが見られる。たとえば『種の起源』で、自然選択により「すべての身体的、精神的資質は完全に向かって進歩する傾向がある」と記している。また前述の結語の直前には、「こうして、自然の戦争、飢饉、死から、私たちが想像しうる最も高貴な対象、すなわち高等動物の創出が直接もたらされるのである」と書かれている。

ダーウィンは、のちに獲得形質の遺伝の考えも大幅に取り入れ、方向性のない変化の主張も後退させていった。それに合わせるかのように、エヴォリューションという語を使用するようになった。

歴史家のピーター・J・ボウラーは、生物学者としてのダーウィンは進化を方向性のないものと認識していたが、社会哲学者としてのダーウィンは進化を進歩の意味で説明した、と述べている。自説が社会に受け入れられるには、19世紀英国社会の進歩主義に貢献できるものでなければならない、と考えていたためだという。自然選択説という自説の核を守るため、それに付随するはずの進化の無方向性を犠牲にしたというのである。ただし、ダーウィンは部分的には進化を発達や進歩と見ていたと指摘する研究者もいる。

いずれにせよ、方向性のない進化というダーウィンの革新的なアイデアは、ダーウィン自身がのちに封印してそれほど強く訴えなかったこともあり、当時は社会的にもあまり意識されなかった。

だからダーウィン進化論が、当時の社会の進歩観に衝撃を与えたわけでも、それと対立したわけでもない。それどころか社会はそれを進歩主義の推進力に利用したし、ダーウィンもそれを利用した。その結果、ダーウィンのトランスミューテーションとエヴォリューションは同義となった。20世紀半ば以降、自然選択を中心に据えた進化の総合説が広く定着し、改めて生物進化が当初のダーウィンの主張通り、方向性のない変化の意味で理解されるようになったときには、生物学者はみなそれを本来違う意味だったはずのエヴォリューションの語で呼ぶようになっていたわけである。

（千葉聡『ダーウィンの呪い』一部改変）

問一　二重傍線部a～cの本文中の言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エのうちから選びなさい。

a　合目的性

ア　物事がそれぞれ目的を持っていること
イ　目的を定めて物事を進めていくこと
ウ　物事が一定の目的にかなっていること
エ　物事の目的が一致するように合わせること

b　強迫観念

ア　相手を脅すような考えを持つこと
イ　きわめて強い恐怖感や不安感を持つこと
ウ　自分の意思に反してある考えがつきまとうこと
エ　ある考えに対して強く固執すること

c　漸進的

ア　ものごとが徐々に実現していくさま
イ　ものごとが一気に進歩していくさま
ウ　ものごとに大きな変化が起きるさま
エ　それまでになかった新しいものが生じるさま

問二　傍線部Ⅰ「日本の大学生は進化する必要がある」という発言を生物学者である「私」がすると、生物学を学ぶ学生は、どうして「鬼の首を取ったように」苦情を述べるのか。その理由として最も適切なものを次のア～オのうちから選びなさい。

ア　私の発言は、学生に対するハラスメントであり、悪い鬼を倒すようにこれに立ち向かって行く必要があると学生は考えるので。

イ　私の発言は、生物学の知識に照らした場合に、不適切な言葉の使い方をしており、その誤りを指摘することは、ある種の手柄になると学生は考えるので。

ウ　私の発言は、一般社会では進化は進歩と同じ意味で使われていることを知らずに間違った使い方をしているので、学生はそれを糾弾すべきと考えるので。

エ　私の発言は、日本の学生の現状に照らした場合に、真実とは一致しておらず、そのような発言をする私の誤りを指摘することはポイントを稼ぐことになると考えるので。

オ　私の発言は、学生にとっては耳の痛い指摘であり、それをごまかすために、私を悪役に仕立てて反撃しようと考えるので。

問三　傍線部Ⅱ「自然選択のふるい」について述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア　少しでも生存に有益な変異であれば、自然選択によって保存される。

イ　どのような変異が自然選択によって残されるのかは、環境によって変わってくる。

ウ　自然選択によって変異が保存されるのは、ごくわずかの個体しか生き残らないからである。

エ　自然選択では変異がランダムに生じるが、人為選択では一定方向に起こる。

オ　自然選択によって、祖先的な形質を残した種が存在を続けることもありうる。

問四　傍線部Ⅲ「ある動物がほかの動物より高等である、と語るのは馬鹿げている」とダーウィンが考えていたのはなぜか。六十字以内で説明しなさい。

問五　傍線部Ⅳ「19世紀前半にはすでに、エヴォリューション――進化という言葉は、学術界で一般的に使用されていた」とあるが、エヴォリューションについて述べた次のア～カのうちから、適切なものを二つ選びなさい。

ア　現代の生物学で言う進化の現象を、ダーウィン自身も後年、エヴォリューションと呼んだ。

イ　エヴォリューションという言葉は、個体発生を意味する語であったが、個体発生の過程は、折り畳まれていたひな型が展開して行く過程であると考えられていた。

ウ　エヴォリューションは一つの目標にむけて進む進歩観と結びついたが、退化（堕落）はエヴォリューションとは関わりがないとされていた。

エ　進化理神論においては、個体発生が成体という目標に向かって発達するのと同様に、生物の歴史的な変遷は神の摂理を実現するエヴォリューションの過程であると考えられた。

オ　エヴォリューションの考え方は、古代ギリシャにまで遡るが、プラトンもアリストテレスも無生物から植物、動物へと進歩していく秩序の存在を唱えた。

カ　ラマルクにおいては、エヴォリューションという言葉は、進歩する内的な力によって、生物が獲得した性質が子孫に遺伝するという考えと結びついていた。

問六　傍線部Ⅴ「ダーウィンのトランスミューテーションとエヴォリューションは同義となった」とあるが、進化についてのダーウィンの考えのぶれについて述べた次のア～オのうちから、適切でないものを一つ選びなさい。

ア　『種の起源』の中でも、自然選択の結果、高貴な生物、すなわち、高等生物が生み出されたとダーウィンは述べている。

イ　ダーウィンは、トランスミューテーションというアイデアを持ったが、それが、当時広く使われていたエヴォリューションとはまったく異質なものだとは考えていなかった。

ウ　ダーウィンはのちに獲得形質の遺伝の考えを取り入れ、エヴォリューションという語を使用するようになった。

エ　生物学者としてのダーウィンと社会哲学者としてのダーウィンでは、その主張が異なっていたと指摘されている。

オ　ダーウィンは自説を受け入れてもらうために、進化を進歩とする当時の社会思潮と対立することを避けた。